



〈公開〉作品にみる生と死

□会場 東洋英和女学院大学大学院
(六本木) 201教室
東京都港区六本木5-14-40

□最寄駅 六本木駅(日比谷線徒歩10分)
麻布十番駅(大江戸線徒歩5分)
(南北線 徒歩7分)

□参加費無料・当日受付有り
□当日先着順100名様

第5回 研究会

鈴木桂子

(すずき けいこ)

玉川大学非常勤講師
本学生涯学習センター講師

2010年2月20(土)
14:40-16:10
*校舎内への入場は14時から

ヒルデガルト・フォン・ビンゲン —幻視と生きる—

■プロフィール

東京芸術大学大学院修士課程修了。美学専攻。スイス・バルン大学で博士号(Dr.phil.)取得。バルン・シニア大学、バルン美術学校講師を経て、現在、玉川大学、東京家政学院大学非常勤講師。東洋英和女学院大学生涯学習センターではドイツ語を担当。専門領域は西洋中世美術。ヒルデガルト・フォン・ビンゲンの幻視を研究テーマとしている。

■主要業績

Bildgewordene Visionen oder Visionserzaehlungen, Bern 1998。「伝説、インスピレーション、そして幻視像—ヒルデガルト・フォン・ビンゲンの〈愛〉の像をめぐる」『剣と愛と』中央大学出版部、2004年。「時代としての剣—ヒルデガルト・フォン・ビンゲンの幻視文学における歴史像」『続 剣と愛と』中央大学出版部、2006年。

内容紹介：西洋中世の精神世界に大きな足跡を残したヒルデガルト・フォン・ビンゲンは、十数年前から新たな脚光を浴びていますが、現代的な解釈からは幾つかの誤解も生じているように思われます。彼女の人生を方向づけているのは何よりも卓越した幻視能力です。伝記や書簡、幻視著作を手がかりに、幻視体験の特色や幻視と病との関係をさぐり、さらには幻視を公表しようとした理由と、その手段のあり方を明らかにしながら、内面の葛藤を克服していく彼女の生き方について考えてみます。ヒルデガルトの幻視著作に基づいて挿絵画家たちが描いた写本画もスライドで紹介します。

第8回 連続講座

大林雅之

(おおばやし まさゆき)

本学人間科学部教授

2010年2月20(土)
16:20-17:50

日本におけるカルチュラル・バイオエシックス (Cultural Bioethics)の可能性

■プロフィール

上智大学大学院理工学研究科生物科学専攻(生命科学基礎論部門)博士後期課程単位修得満期退学。ジョージタウン大学ケネディ倫理研究所客員研究員、山口大学医学部教授、川崎医療福祉大学教授、京都工芸繊維大学大学院教授などを経て現職。(財)生存科学研究所常務理事、日本生命倫理学会常務理事、同情報委員会委員長。

■主要業績

『生命の淵—バイオエシックスの歴史・哲学・課題』東信堂、2005年。「日本の『生命倫理』と代替医療へ向かう死生観を求めて」『漢方と最新治療』16(1)、2007年。「生死のかたち」近藤功行・小松和彦編著『死の儀法 在宅死に見る葬の礼節・死生観』ミネルヴァ書房、2008年。「再生医療技術への宗教の関わり—ES細胞・iPS細胞研究における『全能性』をめぐる」東洋英和女学院大学死生学研究所編『死生学年報2009 死生学の可能性』リトン、2009年。

内容紹介：代理出産、臓器移植など、わが国でも毎日のように生命倫理の問題が議論されています。しかしながら、そこに明確な方向性を見いだせないでいるのも事実です。また欧米と日本の議論の相違についての指摘もあります。それは各国・地域における「生と死」に関わる文化的差異を明らかにしようという「Cultural Bioethics(文化的生命倫理)」の視点にも呼応します。この講座では、その視点の可能性を日本の文化的文脈に探りたいと思います。特に小説(森鷗外、志賀直哉、深沢七郎などの)、映画(小津安二郎、成瀬巳喜男などの)を取り上げ、本大学院で小生が担当する「死生学」関連講義の経験も紹介して話を進めます。

〈次回ご案内〉

*日程が変更になっておりますのでご注意ください
2月27日 16:20-17:50

山田和夫本学人間科学部教授 和歌の発生と系譜にみる死生学的意義

〈予告〉

2010年3月末 発売予定

『死生学年報2010 死生観を学ぶ』



お問合せ先

東洋英和女学院大学死生学研究所
shiseigaku@toyoeiwa.ac.jp
03-3583-4035 (fax専用)